校長室だより～燦燦～ №４６６

Ｉ先生

2021.12.2

１０月２１日（木）に、野田中学校の３年生は修学旅行に出かけた。本来であれば、９月中旬に２泊３日で山梨方面に行くはずであった。コロナの状況に振り回されながらも、３学年の先生方からは、修学旅行は必ず実施するという強い信念のようなものを感じた。

当日は、やや気温は低かったものの晴天に恵まれた。目的地は、那須ハイランドパークである。私も“団長”として同行した。団長の仕事は、基本的に本部待機である。ずっと本部にいるものと思っていたところ、先生方でグループをつくり、３０分ずつの交替制で本部にいることとなった。

私にとっては、かなり久しぶりの那須ハイランドパークである。パーク内を少し散策することにした。すると、Ｉ先生と初任者のＳＳ先生が、何やら楽しそうに歩いていた。私も合流させていただいた。

Ｉ先生が名簿を見ながらチェックしていた。何をしているのか聞いてみた。会った生徒たちの写真を撮り、名簿にチェックしているとのことだった。それを心から楽しんでいる。「あと８人です。〇〇君たちは、ここらへんにはいないと思うんですよね」ＳＳ先生に私はいった。「Ｉ先生って心から楽しんでいるよね。すごいと思わない？」

あと３人となった。さすがに、ここから残された３人の生徒たちに会うのはむずかしいだろうと思っていた。だが、Ｉ先生は、会えることを楽しみに、あきらめずにパーク内を歩いている。何としてでも全員の生徒と会い、写真に収めることを目指している。

こういう人が、学校の先生にならなくてはと思うのである。Ｉ先生は、講師である。とはいっても、学級担任をして、教科の授業も担当している。部活動の顧問もしている。その働きは、教諭と何ら変わらない。違いはというと、教員採用試験を受けている点である。

彼は、生徒とのコミュニケーションに長けている。教員にとっては、大きな武器である。生徒のこともよくわかっている。修学旅行の前日に、体育館で事前指導があった。クラスごとに集合写真隊形に並ぶ練習をした。彼のクラスが一番早かった。クラスごとの整列状況を見れば、そのクラスのことはおおよそ分かる。

福島県の教員採用試験の倍率は、小学校が１．６倍である。かなりの広き門である。一方、中学校は５．０倍である。その状況は、教科によってだいぶ違う。たったの１名という教科もあれば、２０数名という教科もある。平均すると５倍である。まだまだ狭き門である。

あれは、７月だった。毎日、忙しく働き、勉強する時間も、なかなか取れないであろうＩ先生に追い風が吹いた。教員採用試験直前の２週間だが、勉強する余裕が生まれたのである。私はＩ先生にいった。「これって、どういうことかわかる？」「はい、勉強しなさいということだと思います」「そうだよね。風が吹き始めたよ。これを逃しちゃだめだよ。奥さんもお子さんもいるんでしょう。がんばらなくちゃお父さん。今年がラストチャンスだよ」

とはいっても、勉強するのは私ではない。Ｉ先生本人である。８月のとある日だった。Ｉ先生が沈痛な面持ちで私の前に現れた。「これはだめだったか」と思った。ところが「校長先生、受かりました」少しも喜んではいない。戸惑っている感じである。

（次号に続く）